



校長室だより

令和5年度

1月10日

NO. 37

新しい年の始め よい「辰年」のスタートを

今年の干支「辰」は、中国『漢書・律曆志』では「ふるう、ととのう」を表し、「陽気が動いて万物が振動し、草木もよく成長して形がととのった状態を表す」と言います。そのため、辰年は「新しいことを始めて成功する、今まで準備をしてきたことが形になる」年であり、**物事の始まり**の年とも言われます。けれどそんな今年の辰年は、まさに地面が「震（ふる）える」大地震でスタートしました。大自然の前で、人間が無力であることを切に感じます。現地では多くの命が失われ、今も避難所暮らしが続く方々が多い中、なかなか、直接的に、その人たちのために行動することは難しいですが、「もし今ここで大地震が起こったら…」など想像して考えて、現地の人々の生活を思いやったり、自分たちならどうするか考え準備をしたりするなど、「自分」を振り返る機会になるとよいと思います。

3学期の始業式では、児童代表の言葉で、3年生の真優花さんは今年頑張りたいことに「かるた取り大会」と「書き初め大会」を挙げ、来年に向け「かっこいい4年生になりたい」と誓いを立てました。そして4年生の優希菜さんは今の自分自身を振り返って、「(誰にも言われずに)自分のことは自分でできるように」したいと、決意を表してくれました。しっかりと自分自身を振り返り、**未来**を考える秦梨っ子の姿からは、とても素晴らしいスタートが切れたことが感じられました。このように年の始めの3学期は、自分を「振り返り」、「新しいこと(自分)を考え、始める」そんな時であるでしょう。

冬休みにノンフィクション作家の石井光太氏の「誰が子供の国語力をこころすのか」の演題の講演会がありました。その中で、子供が「自分で考えること」が大事であるという話を聞きました。自分や他者の気持ちを考えることが苦手で、行間が読めずに、言葉で人間関係を築けない子供たちが生まれる社会の背景として、スマホ育児や他者との分断、格差社会、管理社会などがあり、子供たちの「国語力」(=語彙力ベース+情緒力・想像力+論理的思考力)が時代に追いついていないのが現状だと言われました。そのためには自由に遊んだり本物に触れたり、異質なものと様々な価値観に触れたりするなど、多様な体験に出会わせ、その出来事から物事を言葉で考え、「言葉」を磨いていくことが大切だと言われました。これから起こる様々な出来事に対して、(だれかに言われるのではなく)「主体的に」、自分で考えて言葉にしていくことが、これからの社会を乗り越えていくためにも必要だと言えるでしょう。



新年になり、かねてから話題になっていた大谷翔平選手から寄付されたグローブが、秦梨小にもやってきました。添えられた手紙には「3つの野球グローブは学校への寄付となります。それ以上に私はこのグローブが、私たちの次の世代に夢を与え、勇気づけるシンボルになることを望んでいます。(一部抜粋)」とありました。こうした体験も、子供たちが大谷選手の子供の頃を想像したり、自分の夢を語ったり、勇気をもって何かに挑戦しようとしたり、そう考えられることが、まさに今、望まれていることなのだと考えます。